教員名	高濱　裕子　(TAKAHAMA　Yuko)
所　属	子ども発達教育研究センター
学　位	博士　(人文科学)(2000 お茶の水女子大学)
職　名	教授
URL　／　E-mail	takahama@kodomo.ocha.ac.jp

◆研究キーワード

親行動発達支援　／　幼児の反抗・自己主張　／　親子システム　／　システムに出現する変化　／　縦断研究

◆主要業績　　総数　(　4　)件

・論文
高濱裕子・渡辺利子
「子どもの反抗・自己主張とそれに対する母親の感情および対処：２歳と３歳との比較」
お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要第４号,pp.15-25,2007　(2 月)
・論文
無藤隆・森下葉子・齋藤久美子・高濱裕子
「保育者の研修に対して大学と附属が寄与するあり方をめぐって：幼児教育未来未来研究会の実践から考える」
お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要第４号,pp.35-44,2007　(2 月)
・著書
無藤隆監修・高濱裕子編者代表
「事例で学ぶ保育内容　領域言葉」
東京:萌文書林,2007　(1 月)
・著書
無藤隆監修・岩立京子編者代表・赤石元子・高濱裕子編者
「事例で学ぶ保育内容　領域人間関係」
東京:萌文書林,2007　(1 月)

◆研究内容

「歩行開始期の子どもをもつ親への養育支援」
われわれは、すでに４年間にわたって「歩行開始期の子どもをもつ親に対する養育支援」を検討してきた。この研究の目的は、　(1)　２歳前後に始まるとされる反抗期における家族システムの変化を、多様な測定法によって重層的に記述すること、　(2)　反抗期をはさんだ歩行開始期の養育支援の具体的手立てを構築することであった。３年間の縦断データが収集されたので、さらに親の社会化方略と子どもの反抗・自己主張との関係を詳細に分析した。すなわち、①２歳時点での親の社会化方略と３歳時点での子どもの反抗・自己主張の関係、②３歳時点での子どもの反抗・自己主張と同時点での親の社会化方略を検討した。縦断データによる追跡的な検討によって、親から子どもへ、子どもから親へという相互影響性のトランザクションが明らかにされた。なお、この研究成果を要約した反抗期の親向けのリーフレット　(「いやいや期の子どもとつきあうには？」2006 年３月発行)　に関する取材や掲載許可申請などがあった。

◆教育内容

大学院前期専攻では、「親子関係論特論」「親子関係論演習」および「保育者養成論特論」を担当した。
「親子関係論（特論・演習)」では、システム論的観点をもちつつ、愛着理論　(ボウルビィ)　や生涯発達心理学に関わる理論（エリクソン）を基礎的な理論と位置づけて概説した。さらに、内外のジャーナルに掲載された親子の関係を扱った論文を取りあげ、各研究の理論的背景を紹介しつつ、論文執筆の所作、批判的に検討する視点などを重視しながら授業を進めた。
「保育者養成論特論」では保育者　(幼稚園教諭や保育所保育士)　の養成や、その専門性や専門性を支えるさまざまな資源について、内外の文献講読を通して検討した。特にフランスの看護師養成との比較もおこないながら、保育者の専門性への洞察を深めた

◆将来の研究計画・研究の展望

歩行開始期の親子システムについてのわれわれの研究結果（平成 16 年度～平成 17 年度科研Ｃ）が、新たな研究計画へと結びつきつつある。3 歳時点の子どもの自己主張は約 70%の親が強まったと認知していることがわかったが、そのゆくえを追跡する必要性が示唆された。そこで、比較文化的な視点をもちながら、対人葛藤処理方略の発生過程について、日本、アメリカ、中国、韓国の研究者との共同研究を推進する予定である。

◆受験生等へのメッセージ

親や保育者などの成人発達のメカニズムには、まだよくわからないことがあります。それらを家庭や幼稚園・保育所などのフィールドに関与しつつ、解明したいと思っています。また、現職の保育者 （幼稚園教諭・保育所保育士）が抱えるさまざまな課題を、発達心理学的な視点から検討したいと思います。